

# 共同討議・農村過剰人口と家族構成

## 研究通信

集 1.

1956年4月刊

別 報  
社会研究会  
村落集部  
丁平教育内  
市大学研究室  
仙台北大研究所  
東北大研究所

### 第三回大会 共同討議記録

(日時)

昭和三〇年一〇月一八日  
午後二時半～四時半

(場所)

毎日新聞大阪本社講堂

司会者  
参加者

喜多野清一、木下義、福武直  
蓮見吉彦、中野芳彦、東家清次、服部  
治則、並木正吉、R.C.D.I.T、森  
正夫、井森謙平、安藤慶一郎、伊里修  
一、中野卓、竹内利美、内山正照、山  
岡栄市、生田清、原宏、北川隆吉、  
松原治郎、山本登、諏訪園岩雄、島崎  
稔、後藤和夫、小池基之、有賀喜左エ  
門、中島龍太郎、南清彦、甲田和衛、  
西田春彦、大内秀明、森井、

〔喜多野〕……今御報告をおきましたのであります  
が、問題はかなり多岐にわたつてゐるようと思  
います。当初「研究通信」等で一般に御通知申上  
ましたが、農業經營と連関せしめて、農業人口の  
問題を研究し展開して行くと云うことなのですが、

本日お聴しましたところでは、これに焦点がしづらっていることは申  
しかねます。

いづれにしても農業經營はどなたも取上げておられるようであり、  
それをさらに社会学的に察との関連において特色づけられているこ  
とも、一つの大ざな特徴であると思います。これは今ままで  
行くのは難しかろうということだつたのですが、そういうことにと  
だわりなく進められました。

そこで農業經營の問題も含めて家の性格と関連させて、農業人口、  
特に過剰人口ということことで、最初に論議されるかと思います。その  
中で小池さんから、かなり經營に結びつけて論じられておりました  
が、時間に制限されて大へんお急ぎになつていたようありますの  
で、この際もう一度要点を説明して頂けると、話を進める上で、大  
へん好都合かと思うのですが、如何なものでしょうか。

〔小池〕……人口が過剰であるか過剩でないか、ということを問題  
にする時、何について、人口が過剰であるかないかを明確にしなけ  
ればいけないと思います。労働力の需要に対する過剰とは、資本主  
義的經濟の中での問題なのですから、農業における過剰人口を問題  
にする場合でも、基本的・典型的には、資本制生產が農業に行われ、  
そこに機能する資本が蓄積され、農業労働力に対する需要が相對  
的または絶対的に減少して、過剰人口が停滞化するという形だと思  
うのですが、日本の場合には、一應資本主義的な生產が農業では行  
われておませんので、それを小農經濟の中にもつてきて、どのよ  
うに適用するか、といつた問題になつてくるのではないかと想うの  
です。もちろんそこで、そのような相對的過剰人口には、資本の蓄  
積ことに資本の蓄積、資本構成の高度化を背景においておつている  
ので、そういう概念をもつてくるということとはまちがいではないが、  
日本の農村の過剰人口をつかむ上に、その理解を歪めることになる  
のではないかといふことも、もちろん反省しなければなりませんで  
しょう。しかし概念としてはそういうものから借りてきて、それを  
拡充して小農の中ではどういう風に過剰人口が潜在化しているかを  
つかむより仕様がないのではないかというように思われるのです。  
そう教しますと、結局、小農の場合は資本が農業を外からとらえる

わけですから、それによって資本の蓄積が阻害される。このこと自体が農村の人口を過剰ならしめる一つの要因として作用する。そしてその中でそういう人口の停滞性自体が生産力を低いものにするから、従つて生活水準も低くなる。だからそこで過剰人口が潜在化する、というように理解されるのではないだろうか。…………そういう過剰人口の潜在化とならんで經營の中で労働力が農業外または農村外に出て行くという場合、すなわち農外労働力に対象化される場合、日本農村では往々にしてそれが安定した形で賃労働されはしない場合がある。そういう形の不安定性が、山稼ぎとか農村日傭とかいわれるものにはあるとすると、そこではやはりそれを停滞的な過剰人口としてつかんでいつていいのではないかという風に考えたわけです。

〔喜多野〕…………そうしますと、相当地域差の問題が出てくるだろうと思うのですが。つまり、日本の農業における資本主義化の程度は、地域的にかなり大きな差をもつてゐる。東北のように、山林をもつてゐるところでは、山林經營はかなり生の人間労働を必要としている。そこで仕事と関連して、地域的な差の問題になつてくると思ひます。

〔小池〕…………近郊農村の場合と、平坦部と山村の場合とでは、過剰人口の具体的な存在形態は非常にちがうと思うのです。たゞ、一般的にいって日本の農村が資本主義化しないというところに、実は過剰人口の特殊な潜在化という問題が、日本の場合にあるのではないかと思うのです。

〔並木〕…………ちょっとお伺いしたいのですが、相対的な過剰人口の場合ですね。農家人口に適用する場合、厳密に狭義に考えれば、今おつしやつたように、日本では資本制生産は基本的には農業にないわけですから、農業における相対的過剰人口の形態としての潜在失業はその限りでは存しない。たゞ工業における、本来は流動的過剰人口になる筈のものが、農村に返されて、農村にたまるということ、例えば、「出稼ぎ型」とか、「失業者の帰農」とかいわれるそういう時期があつたわけですね。それは潜在的な過剰人口の一種態だと

いう理解が今まであつたとおりです。もう一つは、農業に必要な人口それ自体が、日本の資本主義のうんだ産物でしようが、それを吸収する余地は農業にもなければ、工業にも充分にない。その場合、工業に一段出たものが農村におしごめられて、或は工業に出るべき人口が農村に停滞している。この形だと思う。それで現在、農村にどれだけ過剰人口としての潜在失業人口が推移しているか、ということが問題ですが、農村に押し返され、或は出ないでいる人口とはどんなものか。大体長男は農村にあさまるし、次三男は出てしまう。現在農村にたまつてゐる人口は、新しく労働力人口となつたが、未だ出れない人達が主で、敗戦によつて押しもどされた人達は量的にはかなり出てしまつていて、たまつてゐるのは少ない。しかしその量的な少なさが、相対的・潜在的過剰人口の低さを示すメルクマールになるだらうか。というのは、經營のあり方と結びつて、はじめて労働力としていくらを必要とし、いくらを必要としないか、ということが、定つてくるのですから、たゞ一がいに潜在的失業人口が少ないとかたくさんあるとはいえないと思う。この点はどうなんですか。

〔小池〕…………今おつしやつたのは、現在の日本の農業經營をとつてそれに対してどれ位労働力が必要か、その上でどれほどたまつてかかるを量的に把握しようといつた点だつたと思うのですが、一方で現在の農業經營を固定して考え方をめぐつての問題と、もう一つは、經營にとつて技術的に必要な労働力人口と、その經營の生産力によつて、そこに維持される労働力人口との問題が考えられるのではないか。農村における潜在的過剰人口を、相対的過剰人口の概念を拡張して考えたとすれば、生活水準が低いまゝでそれにもかゝわらず、現在の經營の生産にこれだけの人口が必要だという関係の中にふくまれてくるのではないかでしょうか。

〔並木〕…………結局問題はこうなのではないでしょうか。經營技術的にいえば、今の労働力でも極端にこゝまで足りない。しかし地方にいる人口が、何時頃から、いつの時代から相対的過剰人口となつたのか。低い生活水準は明治の初めからある。經營技術的には頭数

からいえば、明治の時代と大きさばかりでなく、変化するほど生産力の発達はなかつた。条件はほとんど變つてゐない。それがある時期から相対的過剰人口といわれてきたのは、どうしたことなのか。やはり他産業との関係において、歴史的に変化があるのではないでしようか。

〔小池〕……そうですね。資本主義体制下における潜在失業人口を問題にするなら、資本主義的生産の方法が確立したということですね。そういう関係がなければ農村内部での労働力の過剰はでてこない。それ以前の時期では、労働力の使用価値はいえますが、労働力の価値は一般的にはいえない。

〔並木〕……もう一つは潜在的過剰人口と今おつしやつたのは自労労働力の評価ですか。

〔小池〕……客観的評価、自家労働力の客観的評価。

〔並木〕……もうちよつと御説明頂けないでしょうか。客観的評価という意味について。「小池」……出てゆけば、これだけに評価される、という評価がつくられてくるということ。潜在的過剰人口はいわゆる「潜在的」で目には見えない、それが頭在化するのは、出ていつて労働力の評価が与えられる、ということを通じてです。

〔並木〕……で、この場合、実は一つの問題が出て参りますのは、「出てゆけば」という風にいわれるわけなのですが、農家は基本的に次男がいれば誰かは出てゆくが、のこりは家から出る解がつかなかつたのではないか。今まで基本的には、たゞ自家労働力の評価も、実は家に結びつけられた範囲内で進んでおるだけであつて、それが家から解き放されるという形で自家労働力の評価が進んでくる。

〔福武〕……客観的評価といわれたのですが、労働力としての評価ということは、どうなんでしょう。とにかく潜在的失業人口とつていうことは、大きな問題です。いくらやつたつて、いつ

までたつたつて結論は出でこない。(笑)それで今並木さんがいわれた家に縛られている、という問題に置換したいと思うのですが。何故それじゃ家にしばられているのか。本来的に縛られているのか、どういう条件が縛らざるを得ないのか、ということを考えてみたいのですが。

〔小池〕……そうですね。その一つは農業それ自体がもつ食糧生産という内容だと思うのです。

〔喜多野〕……食糧生産というのは自給だとじうことですね。

〔有斐〕……それはもちろん大切ですが、日本の場合には資本主義が急速した後でも家族労働を主体とする農業の經營という形のものが、存在しているのだから、やっぱり日本では歐米と同じ形で資本主義は発達しなかつた。それは資本主義が日本に入つて来た時に積みついたか、ということになるのだと思う。このことが農村にも大きな影響を与えていて、資本主義の側からみれば、日本のように家族制度の非常に強い社会へ入りこんで行くと、それに結びつかずにはいられないと思うのです。

〔小池〕……それは残しておかなければ、つまりそれが土台となつていいるといふ關係から、家の制度が結びつくというのでしようね。

〔有斐〕……その家の制度も今では變つた。家族關係は實際にもかなり民主化されて來た。例えば家長権としてもかなり弱くなつたし、男女の關係も余程変化した。特に直系とか傍系とかの差別もなくなつたといつてもいい。そうすると、新しい時代の家族關係は簡単に封建的だといふえないほど大へん変つてきていてると思うのです。それなのに、いせんとして家の制度ないし家を残さねばならないといふことは、相当大きな問題だと思うのです。これは恐らく、社会政策の要因や經濟的要因を任せしめて來た各時代の政治導道と関連させて考えなければいけないと思うのです。そうでないと簡単には説明出来ない。

〔小池〕……そこで家の制度つてことをもう少し厳密に御説明頂けないでしようか。

〔有斐〕……今日では家の制度といつて良いかどうか疑問ですが、大体家庭を守つて行くといふ考え方につつて、いつ

つまり戦後農地改革などで民主化といふことをいわれてきたけれど、改革でもそうであった。これは例えば、戦前の資本主義について見れば、財閥の構造は非常に面白いと思う。それは例えば三井をとると、三井の十一家が三井財閥の中心となつて持株会社を作つた。その持株会社は株式会社なのだが、株といふものを家産として保持していた。その資本構造をみても、傘下のAクラスの直系会社の株はすいぶん大きく持つてゐるが、Bクラスになると全体の一〇パーセント内外で、人車権を引きつて充分に支配できた。株式会社といふと、方々から株式を集めてきていたようだけれど、一方は株で支配し、一方は人事で支配し、それを三井十一家が家産的ともつてゐた。こういうことは他の財閥にも通例であつたが、この事は日本資本主義の構造を見る場合には非常に大きな問題だと思うのです。

〔小池〕……日本の資本の特質ということは、もちろん考えなければならない点です。

〔喜多野〕……家族の生活形態といふと、やはり家の制度の姿といふことになりますが、家族の生活形態はやはり変つてゐると思うのですがね。農村においての家族生活形態は、やはり農業への資本主義の侵入程度、あるいは貨幣制度との連携の差などによつて変つてきているように思うのです。従つてまたそれが過剰人口の問題につつて行きますと、市場との連携とか地域差とかの問題に結びつくような気がするんですけど。

〔山岡〕……（発言あれどきゝとれす）

〔喜多野〕……労働力の問題、動力機械の導入などの問題をもふくめて経営形態と、そこにある過剰人口の生活との関連が問題になると思うのですが、そこでさつき並木さんのいわれた「外に出て行く」という問題も、やはりこゝでは「出て行く」というだけではなく、どの程度出て行くかと、これが、地域々々の貨幣経済の発達の段階の中で、それぞれ評価されるのではないでしょうか。ですかち外の評価が中へ入つてきて、そして中のいろいろな伝統的な労働関

係や伝統的な雇用関係が、だんだん近代的なものに切り替わられて行く過程を問題にして行く。……そんな気がするのですがね。

〔升内〕……さつきおつしやつた、「家に縛られている」ということなんですが、農業人口の問題を考えるには、農家の家族動態と連させてみなければならない。つまり農業以外の仕事につくるものと、農業を引きつぐものとの関係、家から出て行くものと、家に止まるべきものとの「からみあい」から考えて行かなければならぬと思います。農村人口の移動する具体的な形は、こうした家族動態をめぐるいろいろの慣習にも規制されている。人口移動と相続や、分家の問題との関連をみると必要ではないかと思います。

〔南〕……和歌山の農村についてちよつと申上げたいと思います。農村といふましても、災害をうけた山村については、家にしばらくいるいろいろの慣習にも規制されている。人口移動と相続や、分家の問題との関連をみると必要ではないかと思います。

〔喜多野〕……和歌山の農村についてちよつと申上げたいと思います。農村といふましても、災害をうけた山村では、長男の場合は容易だからといふお話をですが、私の調査しました山村では、一九五三年の水害後離村者が相当出ると予想されていたのですが、実際にはそれほど多くない。この場合離村者が多くないのは出られないからです。都市へ出ても仕事がない。村にいればともかくも失業的で古い隠故關係があり、何とか山仕事をあり、また災害工事もある。だから出たいんだが出られない。そういう恰好で比較的山に残つているものが多いいのです。さつきのお話とちがいますので、ちよつと申上げてみました。

〔井森〕……過剰人口といふことをいわれますが、今までのお話では経済学的観点からみておられるようですが、社会学的な見地からも過剰人口は考慮される。例えば農村ではお祭りなど青年がおらないと出来ない。経済的には豊かになつても或る程度の人口がないと農村の社会生活は満足にできない。過剰人口の問題は経済だけではなく社会的な面からもみなければいけないとと思うのです。また生活水準についても、例えば農作業が機械化されて暇ができると、たとえ経済的にはよくならないとも、信仰、教養、娛樂などにむけ得る時間的余裕が生じ、それだけ生活がよくなつたともいえる。こうした場合経済学者たちは必ずしも生活水準が上つたとばかりはない。こういった点社会学的といふか社会的な見地から問題をみて行かなければ

「はいけない」と思ひます。

〔福武〕……「農村は不安定だ」ということを先ほど山岡さんがいわれましたが、私はむしろ労働者の方が安定性に乏しいことに大いに問題があると思う。下層の貧農は別ですが、農家の方が安定している。とにかく「めし」が食えるという点では安定している。だから原君の報告にもあります。家では農業をしながら、ひまな時は出稼ぎをする。もちろん現在の家を守るという伝統的な概念もあるが、家にしばられる条件には、農家の生活のこうした安定性とあつた上に、失業の不安があり、職をはなれたら明日から食えなくなる。農民より生活の安定性がないわけです。だから安全なプロレタリアートとして、もつとも安定した生活をして行ける。見通しがつけば、「家にしばられる」という気持ちもどんどん消失して行くだろうと思うのです。それがないから原君がいわれたように、土地が荒されてもなお残るということが生じてくるといえるのではないか。

〔喜多野〕……南さんと原さんの場合とでは非常にちがつてゐる。九州の場合、鹿児島、宮崎から出稼ぎに出で、福岡や北九州の比較的条件のよい農家に入つてゐる。そして北九州の農家の恩子は月給取りになつてゐる。それとさつきの南さんのおつしやる場合とはちがつてゐると思いますが。

〔福武〕……地域性といふか、自然的条件についてですが、近くのセンターハウスとしての都市の性格、地方全体の産業構造によつても、またそれらと裏はらの文化的水準も問題になるでしようが、単なる自然的条件だけでどうこういふことはならないのではないでしようか。もし家を守るつてことが、本質的なものであれば、例えは経済的に豊かになつたものが村に居て、村から出ないということにはならない筈だ。すなわち、学問ができれば学校にやる。出来ないものが、本質的に伝統が強いものであれば、学問ができるても家は大事なんだから、長男だから家を守れ、お前の方がしつかりしてゐるんだから家に残れ、といつたことになる筈なんだが、現実はそうではない点

をみますと、基本的にはどつちが重要かは知りませんが、小池さんかいわれた低賃金と食糧自給生産が強く支えている。基本的にはそんなものではないでしょうか。木下さん、どうですか。

〔木下〕……大体同感です。たゞ農家の仕事が食糧生産であるという性格。これは正にその通りですけれども、経済学をやつてゐる者が農業を食糧生産といふ性格だけで問題にするのはおかしい。(笑) こういつた使用価値的視点は、あなた(小池氏)とか私の場合は、これを捨棄した方がよい。それはとにかくとして、福武さんのいわれる農民の低賃金または低所得と農業における自給生産の大規模エイトといふ点は、農民をより強く家にしばりつけてゐるという事実と密接な関係にあると思うのです。つまり、農村における潜在的または停滞的過剰人口の存在と半自給的生産とは必然的な関係にあるのです。半自給的といふことは、半商品生産的といふことになりますが、この後の方の性格は著しく解放的であるのに小商品生産の悲しさで、自由に発展するだけの合理的基礎をもつておらず、大工業や商人からいつも圧迫される部面となり、結果は低所得を実現することになり、それが半自給的な面での自衛的・封鎖的性質におつかぶさることになるわけでしよう。このように過剰人口の存在を規定する条件は、少くとも経済的には農家所得の低位性にあると思うのですが、そうすれば問題は農家の貨幣経済面に通ずる日本の産業経済全体の動向との関連で考えられなければならないことになるのではないかでしようか。

〔喜多野〕……そうしますと、木下さん、どうでしようか、先ほど小池さんが過剰人口を論じられましたが、その論議の筋みちの中へ、小農経済をとりあげてるのはどうでしようか。

〔木下〕……私も日本の農村過剰人口の存在形態とその性格の究明のためには、小農経済の性質の検討が基礎的な問題になると思います。経済学上の過剰人口といふ概念は、いさでもなく相対的過剰人口なしし失業といふ資本主義経済特有の法則的現象であります。日本農業それ自体はこのよき意味での過剰人口をその内部で法則的に創出するまでに資本主義化していない。それにもかゝわらず、大多数の農民は他産業経営者や支配的企業労働者等よりも小さい所

得、したがつて低い生活水準のとて、過労に陥つてゐるといふ事実、即ち過剰人口の存在が確認されているのですから、それは農村を含めた日本の資本主義全体の相対的過剰人口が農村や農家に潜在化し停滞しているものとみる外はないでしょう。ところが、このような過剰人口のブーンとなるのに、わが国の農家は実際にあつらえ向きの組織と經營をもつてゐる。それは先ほど申しました半自給的、半商品生産的農業の進行者という性格であつて、つまりは小農経済が日本の資本主義經濟の發展の条件としての過剰人口の粗い手となつてゐるということなのです。そして、このような小農経済は生産と家計が未分離であるという点で、家族制度といふものと、きちんと結びついており、家といふものが小農経営の維持に大きな役割を果してゐることになつてゐると思うのです。

〔喜多野〕……するとやはり、有賀さんがいうような家庭維持とか、家と制度の精神的影響が加わつてゐるのではないか。

〔木下〕……そうでしようね。元来日本では資本主義が特殊な成立と発達をとげたといふことのため、古い家の制度特に農村のそれが充分分解していない。しないから古いイデオロギー的要素が残存してい、それが逆に農業經營のやり方や農家経済に影響し或いは反作用を与えてゐると思うのです。しかしそれも資本主義經濟といふものの成立と發展との係り合いによつて維持されてきた小農經濟の特長、例えば家庭敷や農地等が生活手段でもあり、生活手段でもあるという状態、有賀さんのいわれる家庭といふ概念や自家労力を無償のものとする考え方を存続させてゐる生産と生活の仕方に由来するのじやないでしょうか。

この点で、家の問題は重要な問題だと思います。

〔有賀〕……分解しない、分解しなかつたといふのは、

〔木下〕……それは結局、農村人口を都市産業が充分に吸收し家族制度を近代化することができなかつたといふ特殊な資本主義の性格です。

〔有賀〕……もう一つ、日本で資本主義が歐米のように発達しなかつたことの条件はいろいろあると思うが、社会関係についての本的な態度といふか考え方といふか、そういうものも考えてお

た方が良いように思われるのです。例えばヨーロッパ中世のキリスト教は日本の中古の氏族信仰と大部違つと思うのです。キリスト教には中世すでに個性の尊重とか個人主義的風潮とかいう傾向が出てゐる。このキリスト教的個人主義思想が西洋近世の自由主義、ないし資本主義經濟の発達の地盤として、前からヨーロッパにはあつた。ところが日本にはそういうものはなかつた。明治維新以後所有権といつたものが制定された。それはフランスの民法を模倣して個人的所有権となつたわけですが、それ以後の経過を見るとこの所有権を日本では家産としてみる傾向が強かつた。家産としてすつと以前から規定されていたものに、西洋の法律体系をとり入れたわけだが、それがどこまで実現されたか。少くとも家長個人の所有権を法律の中で認めざるを得なかつたが、それは逆に家長権を強める作用をしたといふ感じがするのですが。その点はどうでしようね。

〔小池〕……問題をもう少し前へもどしてみたいのですが。過剰人口の問題をとりあげる過程で小農經營が問題とされたわけですが、日本の資本主義がその生成、發展の過程で、過小農制を土台として来たということを前提として——何故そういう形態をとつたのかはまず指いて——労働力が家に縛られている、その面を小農經營の中からみれば、食糧の自給といふ点が一つあるのじやないか。そういう点を申上げたのです。それと、相互に補充しあう低賃金の問題です。そして、その外側に日本資本主義におけるエンブロイメントの問題がある。しかしエンブロイメントがすくないといふだけでは、農村における過剰人口の問題はとけない。農村における過剰人口の問題を考えるために過小農制を問題にしなければならないと思うのです。

そこで小農經營と家の問題を考える場合、それがすぐに結びつくというわけにはいかないではないでしようか。徹底した小農經營といいますか、封建的な諸制限をこわして自由な土地所有に基づきおいた小農經營。そういうものはかえつて個人主義思想の粗い手となる場合もあると思うのです。ですから、小農經營の、日本における特殊な形態、そういうところに、家の問題なり、社会関係についての特殊な態度なりといふものが出てくるのではないかと思うのです。

すけれど……

〔註〕

この間、小池、有賀両氏の間に、日本における農業經營

についての討議があつたが、録音機故障の為、記録不能。

〔小池〕……小農經營が家と結びつくといつても、その結びつき方はいろいろです。小農經營そのものだけを考えれば、日本だけの問題でなく、ヨーロッペにもあればアメリカもある。たゞ一般的な農業經營の問題だけではなく、それをささえている經濟的・社会的条件のなかでそれを考えなければならぬ……ですから、個人主義が発達しなかつたから、日本では家族經營がとられたんだ、というのではないよう思います。そういう考え方、農民の考え方、部落

〔松原〕……小池先生のさつきのお話の中では、小農經營の他に、もう一つ村内の雇傭の不安定性といつたものがある、ということでした。

〔小池〕……そうです。過剰人口を考える場合には、その点をも問題にしなければならない。過剰人口の停滞性と村内雇傭の不安定性との関連です。

〔松原〕……御報告では逆に雇傭性が安定してきたから村内人口は大きくなる、という結論を出されてきたわけですが、そうすると過剰人口といつた規定の中でも、村内雇傭の不安定性などどのように位置づけられるのでしょうか。

〔小池〕……あの調査村に觸する限り雇傭の不安定性の中に、過剰人口を考える根拠があるのではないか、という論理を展開したわけです。ですから一定の安定した確固たる就業があるとすれば、それはもはや停滞的過剰人口ではない、と申上げたのです。

〔大内〕……そうしますと停滞的になる以前の過剰人口は、やはり潜在的過剰人口の階級に加えるわけですね。

〔小池〕……過剰人口の一つの存在形態として、停滞的過剰人口という形がとらえられると思うのです。ですから停滞的でなければ潜在的過剰人口が内在していたかもしれない。ですから過剰人口の存在形態を考えれば、停滞的過剰人口と潜在的過剰人口との二つが存

在される。

〔大内〕……日本の農業では、たゞ農業の停滯性が過剰人口の基礎になつてゐるのではないでしようか。たゞ農業での停滯性というのではなく、日本の資本主義全体が過剰人口を基礎にもつてゐるのではないかと思います。だから日本の資本主義全体の停滯性ではないでしょうか。先生の主張は、農業における過剰人口の存在、或いは停滯が、農業における資本の蓄積の過少に求められるとおつしやり、そして農業の生産性を低め、生産力が余るというようにおつしやつたと思うのですがそれによろしいのですか。僕のおきくしたいのは、先生は過剰人口自身を存在させる基礎に日本農業自身の生産力だけを冠かれようとするのですか。

〔小池〕……もちろんそういうことではないんです。先ほどから問題になつてゐるんですが、今度の私の調査の結果を中心として話を展開させたので、農業經營という面から問題を出して来たのですが。しかし一般的に過剰人口の問題を問題にするとすれば、日本資本主義のなかにおける農業のあり方を背景にして当然考えるべきでしよう。それを捨象して全然問題にしないといふわけではもちろんないのであります。これは一応前提とされてその上で調査結果の分析を中心としたのです。

〔大内〕……わかりました。そうしますと、次に農村の過剰人口の具体的な存在形態を規定するメントとしていろいろあると思うのですが、そのメントが具体的にどういったものであるか、ということを抜きにして、日本の資本主義の特質としての小農經營での特殊性を、あまり直接的に過剰人口の存在形態の規定と結びつけたような気がするのですが。この点ではやはり、過剰人口の存在形態と、小農經營の特殊性の関係をみてゆく問題とそれをどう発展させて、日本の農民が家から離れられないか、という問題を考えゆくのか。そうした点の関連はどうなんでしょうか。何か、あまり一般的で、〔大内〕……もう少し問題を整理して。

〔大内〕……何か二つの問題がずれてしまつてしまふようだと思えるのですが。

どうも私の整理のましいのは、過剰人口の問題ではなくて、過剰疲労の問題らしいんですか。（笑）

〔木下〕……過剰人口の問題がら進展して、これは結局農村の「家」といふものにひつかつてくる、というところまで行つたんじやないですか。それで、そういう意味での農村の家の問題で、もう少し社会学の方にお話頂けると……。

〔福武〕……それでね、原君の報告にありましたね。基本的には、家の存在を規定する經營形態は、戦前戦後を通じて一貫しているといわれたのですが、戦後ににおける変化が多少もあるのか、それとも全然変りないのか、その点をお話ねがいたいのですが。

〔並木〕……例えば農戸数をみると一定数が維持される傾向は一貫して變つてない。ところが、一定数を維持した条件を考えみると、戦前と戦後とでは、又もつとさかのばれば、明治から二回の戦争を経て大正に至るまでもううですが、かなり条件が變つていて、戦後は、一言でいえば、戦前は工業の未発達に原因している。戦後は工業の発達を前提にして、いわば家が維持されてきている、という差があると思う。要するに戦後は独占資本のあり方といふますか、それがどれだけの力をもつてしるか、ということと結びつけて農家の数をみて行かなきやならないと思う。未発達という面が全くくなつたとは思ひませんが、つまり一定数を維持するメカニズムが、というのが一つの大きな変化です。もう一つは、何となく感じた点ですが、例えば、いま有賀先生のお話をきいたのですが、家族関係といふことを中心にみた結びつき方がかなり變つてきたと思います。たゞ土地に結びつけられた限りでの家族関係はどうか。農民が土地に結びつけられているという面、これは具体的には食糧生産と結びつくかもしれません、その面は變つてないのではないか。もう一つは、はじめにいつたとと、関連しますが、外の条件がすつかり變つた。極端にいえば戦前は農村が労働力の独占的な供給源だった。都市は補充すべき労働力を再生産するのがやつと、拡大再生産しても非常に小規模にとまつていた。それが戦後はつきりと都市は労働力の供給源として農村と並ぶまでになつてきた。この点は日本

の場合を考えると大きな変化だと思う。それと結びついて生じて来るのは、失業者を農村家族におつかぶせるということが困難になつてきただことです。もつとも失業者や整理された労働者の場合には、大きなものではなかつた。しかしもとからそれを農村におつかぶせにはある傾があつた。だからそこまではきわめて容易にできた。

それ以上はできないという底の浅いものではあつたけれども、とにかく戦前では、その中では自由であるような幅があつた。ところが戦後ではこの幅がなくなつてきていている。だからそれ以上失業者が出ると、もつと失業保険などの社会政策をしつかりやらねばならない。このことと農業以外の労働者がふえてきたという条件との二つの条件があるわけです。その基盤は労働力構成の変化に求むべきものだと思う。家のあり方に規定された人口移動については、家の内訳変化もあるが、同時に外の変化の方が相当大きいのではないかと思う。この点は今日は御報告できなかつたのですけれど。

〔福武〕……外の変化もあるから家のあり方も変つてきている。このことはもちろんいえるのですが、長男でも外に出て行くという問題なのですが……。

〔註〕こゝで福武氏の原氏への質問が出、原氏のそれにに対する

説明があり、それを受けて、並木氏の發言あり。その後記録不能。並木氏の回答の途中より録音される。

〔並木〕……所得の面でみれば潜在的過剰人口はふえてきている。しかし經營の維持とか、「家」ということを考えれば、それに必要な労働力の単位は動いていない。資源の移動という面からみれば戦前と戦後では基本的な変化があつたとはいえないと思います。

〔福武〕……僕がお書きしたいのはその問題じやなくて、一度外へ出たものが、失業なんかで首を切られて帰つてくる。その場合の

〔註〕こゝで福武・並木両氏の押問答が続くが録音は不明瞭。  
〔並木〕……一定の幅の中では自由だ」という場合の、その幅なんですよ。その幅が戦前に比べて戦後では小さくなつていて。

〔並木〕……まあ傾向としては小さくなつたといえるんだけれども、

本質的には変っていない。

〔註〕 こゝで再び福武・並木両氏の押問答)

〔福武〕 ……しかし家族關係は變つて了一般には認めているわけでしよう。男は食えねば外へ当然出てゆくという意識が強まつてゐる。このことは逆にいえば、幅がせまくなつたということだ。たゞ現実の問題としてどれだけ……

〔並木〕 ……結局構造と結びついて論じられるべき概念だと思う。

〔福武〕 ……どういうデーターにもとづいているかといわれるが……これはたゞ感じなんですからね。家に対する概念という点で、たしかにそういうことがいわれるのではないでしようか。それを傍證する

データーをあげるとすれば、戦後すぐ戦災や引揚などで帰つた人たちを調べてみたのですが、東北地方ではフリクションが起つてない。うまくいっているのは、お嫁さんの里へ帰つている。当然帰るべき長男の家へ帰つてゐるのは大ていまづい。そのままさが地域的に遅れているとか、進んでいるとかははつきりいえませんが。先進地帯の方が程度が高いのではないかと思うのです。

〔並木〕 ……今は帰りにくくなつてゐる。それは確かに認めるのですが、その場合は戦前は帰られたんだ、という前提がともかく暗黙のうちにあるのだと思う。

〔福武〕 ……戦前は農村へ帰られたし失業したものが、ほとんど帰村したと簡単に考へられてきていた。しかし實際には大幅なくび切りもなかつたし、失業してもどうにもできないものだけが村に帰つていたんだ。大手のものは小商売がなんかをして何とかやりくりする。そういう具合だつた。

〔並木〕 ……戦前は帰つたが戦後は帰らない。そのような理解が問題だというのです。たゞ帰るにしても幅が狭かつたが、戦後はより狭くなつた、というのなら僕は納得しますよ。

〔福武〕 ……以前から比べれば労働者の生活は余程よくなつてゐる。労働者の方が樂なんだ。樂をしたもののが、失業して村に帰つても樂をしてたんだから、という意識がある。そういうことも

考え方の一つの基礎になるでしよう。

〔原〕 ……農民の労働者に対する評価の変化は、九州についてもいえます。例えば八幡の職工街についてみて、職工といふ言葉が、私の記憶では大体戦前までいわれていた。それが今では、職工といふ言葉は日常会話の中にも出てこない。商人なども、「工員さん」という言葉より、更によい言葉を探そうとさえする意識があります。この点確かに労働者に対する評価のちがいが出てきている。事実、北九州特に八幡などでは製鐵の工員というのが最も安定した階層なんです。

〔並木〕 ……戦後農家から出てゆく階層みると、労働者になる人々についてですが、かなり上層からも出て行つてゐるということはいえると思う。というのは戦前の上層は大てい職員といいますか、ホワイト・カラーの方に出て行つた。もう一つ、戦前は産業労働者の中で、農村出身者の割合が非常に多かつた。そして、昭和初期では軽工業中心だつた。その後に重工業が伸びてきただが、こゝでは農村出身者の割合は相対的には低かつた。ところがその重工業は戦争中からずつと発達してきただが、戦後になつてもその傾向は残つた。つまり農村出身者の割合が低い重工業が残つて、しかも農家の出身者の割合が、同じ重工業の中の産業をとつてみると、戦前に比べて減つてきてゐるといふことがいえるのではないか。もつと極端に割切つていえば、戦前の軽工業段階の時には、男は才三重産業に出ていた。それが戦後どこへ行つたか。重工業の中の比較的賃金の高い機械工業などをみてゆくと、はつきりとそれは都市労働者の産業の性格をもつてきている。農村から都市へ出て行く場合の産業の職種が、外見的には昭和の初期にもう一度逆戻りするといふ大きな傾向をとらざるを得ないような条件がある。この点は甚だ大事だと思ふ。

〔福武〕 ……その点はますます強化される傾向があると思ひます。今度学会の帰りに八幡で三菱化成、三菱セメント、旭ガラスなどの工場に行つてみましたがそこでも合理化がすゝむほど人が要らない。規模は大きくなつてもそれほど労働力は吸收されない。又技術が進むほど農村出身の未熟練労働では「らち」があかない。従つて農村の子弟はなかなか大企業には入れない。そこでしわよせされて不安

定め中小工農とか小商賈などに入つて行かざるをえない。だから日本での工農がもつと現実的に前途しなけれには「家が人をしばりげる」という条件はなくならない、といえるわけです。

〔並木〕……そりですね。しかしそういう状態を経験している条件といふか、メカニズムは立つたでしようね。農工業しかなくつて商業についた人と、農工業であつても入れないという人とでは。それが大切な感じやないかと思いますが。

〔原〕……升内さんにおきし立いのですが、賃労働特に運動競業は東北にはみられないなど立つてゐる人もいますが、私はそうは少くないのですが。

〔升内〕……たつきりしたことはいきませんが、仙台周辺でも原さんのいわれている九州の場合とだいたい同じですね。との様な農業では、現金收入と云ふことが生活の大なる要素になりつてゐる。長男でも家に居て農業をするよりも、外へ出て現金收入のある所で働く方がよい。自分の家の経営負担はあまいらしい。田植などまだけ休んでもらつたらよい。主人は農業ができないてもよいか、たゞ娘さんは農業ができるといふ図る。だから、いまは若人が女子夫で主に農業をやつている家が多い。もちろん、このような農業では差別性はない。とにかくこうした形で、農業から一応離れて、長男は取を出ないし、娘を連れてくるといふ形はとられるわけです。たゞ、東北では近代工農が未発達なので、都市に労働力を大層に吸収する源県がない点は、北九州などとちがうところでしょう。でも、仙台周辺農村から、市へ通勤する人口は相当なもので、若い男たるまゝの村に屋間はいません。それに近頃では、高等學校へ行きたいといふ子供が増えていきます。

〔原〕……敵の面からいふ危機といふよりも、むしろ危機的な要因変化の資的面から私は見て立つたのですが、従来は教育程度の高いものほど都市へ出て、低いものは村に残る。都市がどんどん勢迫して行くうちに、長子であるが故に立つてしまはれた条件は相対的に立つてきていたと思う。

〔並木〕……それは僕も認めます。結局長子は（野尻教授）は農産思想と結びついて、なかなかくならない。

〔褐流〕……家に縛られて残るといふのは、そういう意味ではないですか。

〔原〕……近代化の限界はどうなるのか、という疑問も残つたわけですが、例えば長男でありながら、高等学校や専門学校に出てやつてゐる。ところが自分は退職資金によつて、かねてから引退したから農業しようとしている。

これなどはやはり土地というものが大変な意味をもつてゐる事を示すわけです。精神的ないゝ方をすれば、日本では稻作の発見以来今まで、最大の能力であるといつてもよいと思ひます。まあそういう大きな概念が、いまあげた都市労働者から還元した農家の場合、彼等の意識の中に生きていたらう、といふことは出来る。農地といふものをもちたことができない。引退業といふ形をかねて土地や医師を退職の時の金で買つた以上はその家の誰かはそれに残さねばならない、という問題を家庭の中に課題として残しながら、彼自身は、そういう引退業についていたわけです。出身の村や家にではなくアーバン・フレンドにですね。そこに農村から都市への流れの中にちがつた意味での還元、即ち土地といふものへの態度があると思うのです。その点は非常に神秘的な医師がある。と僕は思うのですが。

〔褐流〕……しかしそれはどこもある例ではない。退職金だけでも食えなど、息子にかかるなりと思つても思うようだいかない。安定妻をうるため農地を買うのではなくでしようか。この人が更に何か適当なリストがあるとか、食つてゆける年金があるとか、息子に化されをしてもらおるとか、何かこうした保証があるときには帰らなければならぬでしようか。

〔並木〕……つこ經濟的な問題から考へると、一二三男は別ですが、長男の場合、つぎつめていえば、動けない立つたことは、家を背負つて出るとか、妻子をかゝえて出るとかを意味する。それで、日本の産業労働者についていえることは、自分一人の貢献で家族を養つてはいけない、ということ、つまり多就業労働といふか、一家とあわせて生計を維持しているのです。家を出て住居を探すといふ場合、妻者の職業にも好都合なところで、立つたわけで、そういう条件があつて、はじめて家を捨てて出られるので、もつと具体的

はどうと、低賃金ということは、そういうことだと思う。

(南) ……わが国における農家総数にあまり変動がなかつた原因の一つとして小農保護政策がなした役割も認めねばならないだろう。されどできることはないけれども、実際にはそれが行われなかつた。その理由として保守党の地盤はおくれた農民だし、農地改革後兵力を考へる場合にも、農民を叩きつぶそうとは決してしない。又これは日本の場合だけではなく、英米でも中農保護政策という名のもと〔並木〕 ……確かにそういうことはあるでしようが。たゞ英國の場合ちがうと思ひますが。次に小池先生もおつしやいましたが、農戸数が動いていないということは、日本の場合だけでなく世界的なことです。だから僕は日本の特殊性をそこから強調したい、もちろん独占資本の政策だとすることは確かにいえるでしようが、基礎的な条件やメカニズムは、もつと経済的に説明できるのではないかと考へられる。例えばわが国の歴史をみると、長い間インフレ政策はやつてきて、ほんの少ししかデフレ政策はやつていない。デフレ政策を徹底すれば人間が、都市にあふれて失業者が顕在化したでしよう。日本経済がこれを支えうるかといふと、多分出来ないでしるといふことはできなかつた。それですぐにインフレ、更には戦争とかになつてきたのではないでしようか。

(大内) ……今までのお話は主として完全雇用についてでしたが、それは別に兼業の形態についても問題だと思うのですが、

(並木) ……兼業の推移についてですか。統計的にみて割り切つていえば、戦前は農業が主で兼業が従つた。稼いだ金で農業の設備などの方に資金をまわした。ところが戦後は兼業が主で農業が従となつてゐる。これは戦前・戦後の他産業の未発達、発達の関係からいふことです。だから現在の兼業農家に、兼業生産の担当者とし

ての資格を要求するのは、原則的には間違ひだと思う。

(大内) ……ですから、完全雇用の場合と同じような考え方をなさるわけですね。

(並木) ……支える条件の変化という意味ではそうです。

場合もあるでしようし、又兼業をもつた農家といつても、全部じやなくてある一部分ではないでしようか。

(並木) ……こゝで僕は兼業農家を支えている条件といつたものを上げたのですが。

(喜多野) ……そうしますと、日本農村の過剰人口はどうなるでしょうか。今まで外からの関係は大部論じられてきたのですが、農村において兼業農家という形で潜在している、というところなのですか、

(並木) ……それとも兼業農家になりきつてしまつてしまつてるのでしようか。

（喜多野） ……そうしますと、つまり小池さんいわれた停滯性といふことですね。これがどこを区別されてゐるのでしょうか。

(小池) ……潜在的といふのは、例えば、農家の労働力として吸収されてしまうのですが、しかしその生産力の下では充分な生活ができる

(並木) ……それでわかりました。では停滯的といふのは、

(小池) ……停滯的といふのは、現在就業はしているのです。いる

(並木) ……例えれば、そうしますと、農業に五十日しか働いていない

けれどその就業は非常に不安定で非定期的なんですね。従つて一定の規則的な完全な就業状態とはいえない。

(並木) ……例えれば、そうしますと、農業に五十日しか働いていな

い。とこう場合、これは停滯的なのですか、潜在的なのですか。

(小池) ……それは一応農業外の労働とを区別して、一方で農業労働として吸収されていながら、しかもそれによつて非常に低い生活

しかしあり得ない。

(並木) ……これを潜在的といふのですね。

も、その兼業の状態が不安定だという場合、これを停滞的としてつまえられないだろかと思うのです。だから、この点で、過剩人口の内在だ、といつていいのではないかといふことなのです。

〔並木〕……つまり、農業における相対的過剩人口を潜在失業とうわけですね。それから小営業における潜在的過剩人口を停滞的といふのですか。

〔小池〕……そうじゃないのです。農家の中における過剩人口、つまり農外労働をすると、いふことは農家によくまれてゐる人口である場合農家から見れば兼業の形なんですが、その当事者から見ればそれが専業という場合もあるでしょう。それが充分に生活するだけの基礎をあたえられていない。或る時はAの処へ行つて働き、あるときはBの処へ行く。何処へ行くかわからぬ。これを停滞的といふのです。もしそれが定期的に安定した仕事となりうる様な条件があれば、それは過剩人口ではない。過剩人口といふことが問題になる意味は、それが常に産業予備軍として問題になるのです。それが先ほどがらはつきりしていよいよ思うのです。何故過剩人口が問題になるかといえば、それは資本主義的な労働力供給に対する圧力として問題となる。この点だと思う。過剩人口をとりあげる方向が、はつきりしていなければ、問題の焦点がはつきりしないのではないかと思うのです。私は過剩人口が問題になるのは、具体的にいえば、日本の資本主義における産業予備軍としてあると思います。ですから、兼業農家における不安定な就業状態も出てくるし、又農村内における低い生産力に基づくおこころの、そして低い生活水準に現われてくるような、そういう労働力を過剩人口だ、だから外に工業その他での雇用があれば出していく。そういう関係を通じて潜在していた過剩人口の問題が表面に出てくる、と思うのです。

〔並木〕……たゞその場合、問題となるのは、外に工業がある、ところ、ということですが。

〔小池〕……ちがつただろかといふことは、農業経営の中の、或はあり方の問題ですね。資本主義全体の側からいえば、長男が出で

とうが二三男が出て行こうが一向差支えない。  
〔並木〕……長男はなかなか出ない。出たいという意識はあります。が、家があつてなかなか出られない。二三男はさつさと出て行きますが、その場合、この長男はさつきの先生のお考え方では、産業予備軍として可能的にはあるが、現実的にはない、というように理解されるわけですね。

〔小池〕……どうですか、産業予備軍として……。過剩人口がある場合に、農家における地位が問題になるつていうのは、社会学的な扱い方であつて、経済学的な扱い方ではない。と考えるんですが、つまり過剩人口そのものの問題ではなくして、過剩人口が内在するとして、それが家の中はどうとらえられているかといふ問題なのではないでしょうか。

〔福武〕……それでですね、時間もだいぶ超過しているんですが、今いわれました社会学的な考え方といつても、村落社会研究会は別に社会学的でなくつてもいいわけですが、それは別にして、この辺で、兼業農家は多くなつた、出稼ぎがふえて、こういつたことが家庭生活にどういう影響を及ぼしているか、ということについて今まであまりお話をならなかつた方から時間のある限り指摘して頂きたいと思うのですが。

〔小池〕……長男の出方についてなんですが、戦時中に私が岐阜県のある村その他で賃労働への出方を調べた例で申しますと、長男が出るかといふことはそれほど重要ではない。長男だから出るとか出ないとかではなくて、むしろ農業担当者または後継者が出ることによつて、農業のあり方がどうかがつかうかといふこと、例えば非常に荒廢した、ということなのです。ですから僕としては、長男が出るかといふことは、その点だけからいえば、日本の小農經營にとつて基本的なものだ、とはいえないようと思われるのです。

〔福武〕……どうでしようかね。家族関係における変化つてものは、に及ぼす影響について報告されました。なお家におけるスタイルスというようなことについても調査なさつたようになりますが、それについて二つの部落を比較されて、一方では老人や妻のスタイル

タスが高いが、一方は青年や夫の方が高いといったことについて、

何かお話を……。  
〔中島〕……その点については簡単に申上げたのですが、要するに平村の場合は全般に農家としては大へん程度が低いというか農家としての条件に恵まれない家が大部分で、農家というより主に兼業労働に依存している半農半労といったタイプに属します。そこで家の合には、開発によつて大きな変化を受けなかつたといえるのですが、御報告したように、こゝでは三九世帯のうち一四名世帯主または妻が外に出ている。相続者は四三名中一四名、非相続者の場合は七一名中二七名。その全部が半ば定住的な出稼ぎによるわけです。そこでも後に残つた家族は、世帯主の場合でも比較的年者、女と子供が多く、妻が労働の中心とならざるをえないことになる。中には傍系親、例えば弟の妻だけ後に残つて外へ出るという形がてくるわけです。家を守り畠を守る負担は主として女にかゝつてくるので、そういう場合、同族のつながりより娘の実家とのつながりが非常に強くなつてくるのが一つの特徴です。それからまたまだ青壯年の労力を家族内部にもつてゐる家は相対的に労働力が強くなつてくるわゆ、和紙、薪炭原本伐採などの共同作業では女はついてゆき仕事をまとめ、その名義で一括して農協に納めるのですが、どうしても男の労力をもつてゐる家が中心になるわけです。こうした形が相ノ倉では一般的で多くの家は家族の現住形態が二つに分割されている。年輩子供は残される。生活程度のちがいと低賃金とから、すむなく離れているのは仕方がない、といつた形で、また出稼先の職業も必ずしも安定しているわけではないから、いざという場合の用意も必要であります。だから部落だけに限定して考えれば、家を守るとか土地にしばられることは負担になつてゐる家が多いわけですが、出稼の不安定なつてくる。ノーマルな直系的家族構成をもつ少數の家族の相対的ステイクスか、部落を単位とすれば高くなり、部落中心の仕事が、こうした家を中心に行われる仕組となりることは特に後戸強くな

れてきた。このよだな状態の推移は、内外の条件とにらみあわせて考えていかねばならぬと思います。それから、祖山部落の場合は、発電所ができたおかげで、若い世帯主または相続者はそこに勤務し、その妻や老人夫婦が山や畠の仕事をする、といつた職工農家の形をとつてゐる。しかも勤務所が大企業系列に属し、賃金收入も村の現金収支の水準からみると大きなウェイトを占める。そこでこの部落では、発電所に勤めるものを出している家、特に正式に社員としての勤務者を出している家とそうでない家との間には、例えば當農資金などにても大きな隔差がでてくるわけです。いま一つ、この部落では古い世代は、まゆや薪炭などの兼業や出稼で、兼業農家として家をよくする考えが強いが、三千代以下の勤務者の場合には、農業は飯米程度の田を作るにとどめ、共同作業を要する合掌作りの藤根の互しひきもあり関心を払わない。世代間に明らかに生活態度の差が出てくるし、現金収入の多いものゝ効率力が高くなつてくる傾向があるようです。例えば家屋の改造、特に共同作業を要する合掌作りの藤根の互しひきへの変更や、家屋内部の造作の改造などが進んでゐるのは、この部落の特定で家をみればその生活程度や生活様式が推定されるのも、新しい傾向の影響のようと思われます。  
〔井森〕……二つの部落をおやりになつて比較されたのですが、地城差の偶然的なものがそこに入ってきて、それが結果に影響していくとも考えられる。例えば人口の動態などでも、三つ位の部落の平均で比較される方が科学的だと思うのですが……。  
〔中島〕……調査は四つの部落をとつてやつたのですが、地城差の極端と極端といつたはつきりしたちがいの出てくるところを対照的に比較してやつたわけです。従つて平均ではなくて典型的な事例の意味をもつてゐる。まとめる場合には標本的代表性も一応考慮したいれねばならないと思ひます。なんいはすこしあがうところにしばられるということも家の制度の要求でしばられているのと、経営体としての農家の条件でしばられるといふのと両方あるわけです。  
〔喜多野〕……その点は報告でもふれて居られたと思います。家に

〔中略〕……家にしばられるといふ場合、詫問は実古から

極的な面が強調されてきたが、これを消極的もしくは、ネガティブな側面が一方にあると思う。例えば、長男は残れる、残らねばならないという場合のしり方と、二三男が外へ出て行く、その方が家

の方々にお廻しして、校閲して頂いてあります。そのため、かなり時間がかかりましたが、一応万全を期したつもりです。関係各位の御協力を併せて感謝いたします。

面とが相続して、家の体制を維持してきた。この場合、子供や厄介者を折出する家の技能が、やはり家族主義の要件となつてゐるのでないか。しかもこのような二側面のしづれが強く働くかは、家の可能な条件、例えば家産分与の可能性などに依存しており、いつれとも一概に決められない。特に家族員をしばらないで外へ押し出す機能は昔からあつたし、低い層の農家では特に強くあらわれてくる。従来の家族や同族の研究が、どちらかというと中層以上の農家を中心いてきたために、こういう機能はあまり注意されなかつたが、今後はこの点も家族意識などと結びつけて、もつと精密に分析する必要があるのでしようか。

本年一月の世話入会の席上で、本年度も「農家人口の変動と家族構成」という前年の共同課題をひきつづき検討することに決定しました。この記録もその研究を前進させるために、特に「研究通信」の別集として、会員全部に御わけすることになつたものです。何卒、その点御諒察の上、どしどし御意見を「研究通信」に寄せ下さり。

この点は非常に難しい問題で、一概に従来の研究がこうどうしないようにも思われます。いづれにせよ、今後は大いに研究すべき問題ではあると思われますが、大体時間もだいぶすぎましたので、こゝいらでこの討論を終りたいと思ひます。

卷之三

(抽手)

なお、この別集は少々大部の上、臨時のものもありますので、かなり会計上はむりの点もあります。会費の払込方を活潑にして頂かねば、今後の運営に支障も生じますので、御協力をねがいます。できるだけ研究室などでとりまとめ御送金下さい。（口座番号は東京一二二一八六六です）

オ三回大会の共同課題についての「討論記録」をおとどけいたしました。学年末の業務にわざわざ、延引いたしましたことをおわびいたします。この記録は録音にもとづいて作成したのですが、大阪市大の山本登氏にもつばら面倒な仕事を担当して頂きました。何より同氏の御尽力を深謝いたします。なお、この記録見てお話を

（竹）